





Verlag des Waisenhauses

GOTTFRIED KELLER

Der grüne Heizer

8

Stuttgart

Verlag von Knapp



1845

昭和二十七年六月一日 初版印刷
昭和二十七年六月五日 初版發行

世界文學全集(十九世紀續篇)
ケラー篇(第十三卷)

緑のハイシリヒ 上巻

定價 貳百五十拾圓

地方定價 貳百六十拾圓

譯者 伊藤 武雄

編集者 河出書房 山口 幸

發行者 東京都千代田區神田小川町三ノ八 河出 孝雄

印刷者 東京都文京區關口町一四〇 盛英 信

發行所 株式會社

河出書房

振替口座東京一〇八〇二
電話神田(25)三一七四

上巻 目次

第一部

第一章	血統の讚美	三
第二章	父と母	七
第三章	少年時代 最初の神學 學校の席	一四
第四章	神と母との讚美 祈りについて	二〇
第五章	メレット	二四
第六章	ふたたび神について マルゲレットとその客	二九
第七章	マルゲレットのつづき	三四
第八章	子供の罪	四三
第九章	學校の黎明期	四六
第十章	遊ぶ子供	五一

第二部

第十一章	芝居の話	グレートヘンと尾長猿	一五
第十二章	讀書家の一家	嘘をおぼえる年頃	一六
第十三章	武裝の春	少年時代のあやまち	一七
第十四章	法螺ふき	借金 子供のなかの俗物	一八
第十五章	沈黙のなかの平和	最初の敵と彼の破滅	一九
第十六章	無能な教師	わるい生徒	二〇
第十七章	母なる自然への逃避		二一
第十八章	親類縁者		二二
第十九章	新生	活	二三
第二十章	職業の豫感		二四
第二十一章	安息日の牧歌	教師とその子	二五
第一章	職業の選擇	母と助言者たち	二六
第二章	ユードイトとアンナ		二七

第三章	英隠元の歌	三三
第四章	髑髏の踊り	三七
第五章	仕事の開始　ハーバーザートと彼の畫塾	四三
第六章	毒　麥	五三
第七章	つづき	五八
第八章	ふたたび春	六三
第九章	哲學者との論戰　娘たちとの戦い	七四
第十章	四阿の法廷	七九
第十一章	信仰の努力	八五
第十二章	堅信禮の式典	九五
第十三章	謝肉祭の野外劇	一〇一
第十四章	テ　ル	一〇七
第十五章	食事中の談話	一一三
第十六章	夕景色　バルタフォンブルネック	一二三
第十七章	慈善看護團の僧侶	一三六

第十八章 ユーデイト	三三
------------	----

第三部

第一章 仕事と瞑想	四〇
第二章 奇蹟とまことの師匠	五三
第三章 アンナ	五三
第四章 ユーデイト	五七
第五章 師匠と弟子との放埒	六三
第六章 病む者と生きる者	七一
第七章 アンナの死と葬式	七七

緑のハイシリヒ
上巻

第一部

第一章 血統の讚美

私の父は大昔からある古い古い村の百姓の倅だった。その村は、アレマンネン（南ドイツ、スイスに住んだ古代ドイツ民族）の一人が土地分割時代に鎗をその地に立てて、農場を営んでからこのかた、その人の名を村の名としてきた。爾來、數百年の歲月を閲する間に、村の名づけ親となつた一門は、いつとはなしに名も無い人々の間にうずもれてしまつたが、そのうち家來の一人が村の名を自分の稱號とし、館まで築いたといふものの、この館もはたしてどこにあったものか、今はもはや知る人もないし、その血統の最後の「貴族」が歿した時期もまた不明である。しかし村は今もなお現存するばかりか、人口もふえて昔にまさる繁榮をしめし、しかも二三十の姓が昔から今に傳わつて、枝から枝へ分れていった多數の家族にも、依然としてその少數の姓で事足りてゐる。建てられた年代こそ古いが、いつも白く塗りなおされてきた教會のまわりには、一度も擴張されたことのない手狭な墓地があつて、その土は文字どおり塵にかへつた先祖代々の骨だけでできている。だから、十フィートの地下まで掘り下げて、かつて人間の體を假の宿として、畑の土をいっしょに耕さなかつたような土は、一粒もないといえよう。いや、これは言いすぎだった、私は忘

れてゐた、周圍の青い山に生えている、同じように古い大家族のなかから伐りとられてきて、いつもいっしょに土のなかへ埋められる、四枚の縦の板のことを。それからもう一つ、經帷子にするごわごわした、どこへ出してもはずかしくない亞麻布、これもこの耕地の上に生えて、紡がれ漂白されたもので、今いった縦の板同様、いわば、この家族の一部であり、村の墓地の土を餘所の土と同じように、いかにも冷え冷えとした黒い土にするのにあづかつて力がある。ここでは草の色までがほかよりも冴えた緑の色をしめし、薔薇と素馨とが神々しいばかり亂雑に豐饒に生い上げているから、新しい墓の上に花の木を植えるというよりも、花の林を伐りひらいて墓を立てるといふ方が適切だ。そしてこの墳墓のどこを新規に掘りかえしたらいものか、その境界を精確に知つてゐる者は、ただ墓掘りだけである。

村の人口は二千足らずで、そのうちの二三百人ずつが同じ姓を持つてゐる。しかしおたがいに親類づきあいをしてゐるのは、同姓中でも精々二三十人ぐらいである、というのは、血統のつながりが曾祖父の代までわかつてゐるのは稀だからだ。時代の底無しの深淵からうかび上つて、娑婆の光を見に生れてくるものは、できるだけ十分にその光を身に浴びて、働いて、生命を大切に、死ぬ時がくれば、泣くなり笑くなりして、ふたたび闇のなかへ沈んでゆく。だが、彼らは自分の一身に關するかぎりには、三十二代の連綿たる祖先をもつことを腹の底から確信して、その祖先の血族關係なぞを穿鑿するよりも、むしろ自分たちがその鎖をたち切らないように

努力する。彼らがこの地方のありとあらゆる傳説や奇談をかたるのに極めて精確であるくせに、祖父さんと祖母さんがどんな因縁で縁組みしたかを知らないというのも、それがためである。徳という徳はひとつ残らず、少くとも處世上自分が眞の美德だと考えている種類の徳は、めいめい自分がもっているに信じているが、惡業のほうになると、百姓も貴族も、祖先のそれを忘却の淵に沈めてしまいたいと願うのも、當然のことである。いくら威張つてみても、彼らがともすれば人間の本性を現わすということは、これまた已むを得ないからである。

圓形の廣大な森と畑とは、村民の無盡藏の大資産である。

この富は昔から大體において増減がなかった。時にはどこかの娘が嫁にゆくときにその一部分を持ってゆくことがあつても、そのかわりには若者どもが八時間ぐらい離れたところまでちょくちょく遠征をこころみ、十分にその償いをつけもするし、同時にこれはまた村民の氣風や體格の上に然るべき變化をあたえる役にもたつてゐる。だから、彼らはその點、ゆたかな貴族都市や商業都市の或るもの、ないしはヨーロッパの王家などよりも、村の潑刺たる繁榮のためには、一層深い明察をしめしているわけである。

ただし富の分配には年々多少の變化を生じて、半世紀ののちにはほとんど舊態を認めがたいほどである。昨日の乞食の子が今日は村の長者になるかと思えば、その子孫が明日はまた中産階級としてしがない生計を立て、擧句のはてにはどんな底まで身を墮すか、それとももう一度返り咲くといった有様

である。

私の父は若死にしたので、私は父からそのまた父の話を聞く機會がなかった。したがって私は祖父のことは何も知らないといつてもいいくらいだ。ただ知っていることといえば、家族の數のすくない私の一族が清貧に見舞われるようになったのは、祖父の代からだつたということだけである。とはいへ、話にも聞いたことのない曾祖父が道樂者だつたなどとは考えたくないから、曾祖父には子供が澤山あつて、財産が四分五裂してしまつたと考えるのが、眞に近いように思われる。事實、私には遠縁の親戚が山ほどあつて、誰れが私の何にあたるやら區別がつかなくなつたけれども、誰れも彼れも蟻のように齧齧して、ばらばらに入手にわたつて鋤きかえされてゐる他所の大部分を、ふたたび我が手に取りもどそうと心がけていた。そればかりか、そのうちの或る老人たちなどは、その頃すでにふたたび金持になり、その子はまた元の貧乏へ逆もどりしてゐたほどだつた。

當時のスイスは、公使館附書記官ヴェルテルの眼に映じた貧弱きわまる昔のスイスとは、幾分の隔たりを生じていた。

フランス思想の若芽は、オースタリー軍、ロシア軍、フランス軍などが撤きちらした夥しい舍營券の白雪の下に埋もれてしまつたといへ、調停憲法（一七九八年フランスはスイスをヘルゲンにあり、ナポレオンは一八〇三年調停憲法を制定し、舊九州に新たに大州を加え聯邦とした）のおかげで我が國にもおだやかな晩夏が訪れてきたから、私の父は或る朝飼つていた牝牛を放つたらかしたまま、にわかに何か良い手仕事を習おうとして、市へ飛びだして行つてしまつた。その後村人た

ちの間で父の消息を知る者はほとんどなかった。それというのも、父はきびしい徒弟時代を見事にきりぬけたあとで、山の彼方の魅力にひかれて、ますます大膽な飛躍をころもながら、熟練した石工として遠い國々を遍歴していたからであった。故郷の村の人たちも一七九〇年代には、自分たちの住んでいる國が大昔から共和國（スイス諸州は十四世紀頃からハプスブルグ家との協定によって政治的自由を得ていた）になっていったことに漸く氣がついたのだが、私の父が放浪していた間に、ワテルローの戦後に訪れたばかり音のする造花の春が、餘所と同様、このスイスの隅々にも青白い蠟燭の光を投げるようになったので、村へも、復興という名前の貴婦人が、丸彫角形のボール箱を山と積んで、美々しくお乗りこみになり、この片田舎で出来るだけ寛潤な暮しをおはじめになった。居心地のいい遊び場のある、影深い森や山や谷、魚の澤山いる澄んだ川、さては、現在人の住んでいない城がところどころに人目をひいている廣い賑やかな近隣にも、同じような行樂の地を數多くひかえているので、この田舎住まいの貴顯の所へは、市から獵の客、釣の客、舞踏の客、歌の客、食道樂の客、酒の客が續々と詰めかけてきた。その連中は、獐骨で裾をひろげた仰山なスカートや假髮などは革命のどさくさまぎれに綺麗さっぱりと振りすてて來、そのかわりにこの地方としては幾分遅滞きの氣味ではあったが、皇帝時代のギリシャ風の衣裳を身につけていたから、動きまわるのにも至って身輕だった。百姓共は、田舎住まいの貴婦人たちの、白い薄物につつまれた女神のような姿や風變りな帽子や、それよりももっと奇抜な、腋の下からすぐに裾がひろ

がっている衣裳なぞを、ぼかんとした目でながめていた。この貴族政治の華々しさが一番見事に花咲いていた場所は、牧師館だった。スイスの革新派の村の牧師は、北の方の新教の同職者とはちがって、決して腰の低い貧乏人ではなかった。田舎の牧師職はほとんど例外なく、勢力をもった都市の市民たちの手に自由ゆだねられていたから、これは世俗的な名譽職にかわる、ひとつの支配的な地位ということになっていた。兄弟のうちに劍と秤とをつかさどる者でも持っている牧師のごときは、自分もその榮譽にあずかって、牧師は牧師らしく全體の名において權柄すくなく働きもし支配もおこない、あるいは、屈託のない暢びりした生活をいとなんでいた。勿論、實家が大金持だというような牧師もなかなか多かったから、田舎の牧師館は、さながら貴顯の別荘のごとき觀があった。なかには實際貴族出の牧師もあって、百姓どもに牧師の御前様と呼ばせていたのさえある。私の故郷の村の牧師は勿論そんなではないし、決して金持でもなかったが、さすがに市の古い家柄の出だけあって、その風采なり暮し向きなりをみると、お蠶のなかで育った都會人特有の誇りと階級意識と遊び好きとが混りあっていた。彼には幾分貴族と呼ばれることを鼻にかけているところがあり、また上手に牧師らしい威嚴の上に、無遠慮な軍人らしい田舎貴族らしい衣をうつすらと掛けていたが、なにしろその頃はまだ近頃流行の、宗教パンフレットを出版する保守黨なぞというものは、その名稱もその本體も知るものがない時代だった。牧師館のなかには實に賑やかで陽氣だった。教區民は畑のものや家畜小舎のもの

をふんだんに納めるし、客人たちは自分で森のなかから兎、鵲、鵲なぞを取ってきた。獸の狩りたてだけはこの地方で行われなかったが、百姓たちはそのかわり大々的な魚釣りの會には鄭重な言葉で参加を勧誘され、これがまたその都度宴會に早がわりしたので、牧師館には喜びと賑わいの絶えたことがなかった。人々は或るときは近隣を歩きまわり、ひと境になって訪問に出かけ、またその種の訪問をうけ、天幕を張ってその下で踊り、あるいは清らかな小川の上に天幕を張って、ギリシャ女たちがそのなかで水を浴びた。また或るときは一團となつて人里離れた涼しい水車小屋を襲ひ、あるいは鮮詰めになつた小舟を湖や川の上に浮かべたが、牧師は鴨獵の鐵砲を肩にかつぐか、岩乗な籐の杖を手にもつかして、いつも先頭に立つたものだった。

こういう連中は精神的な要求は餘りもつていなかった。牧師館にある世俗的な圖書といへば、私もこの目で見て知っているが、古いフランスの田園小説が二三冊と、ゲスナーの田園詩と、ゲレルトの喜劇と、ぼろぼろになつたミュンヒハウゼンが一冊あるだけだった。ヴィーランドの著書が二三冊あったのは、どうも市から借りて来て、借りっ放しになつてしまったものらしい。ヘルティの詩はよく歌われたが、例えばマッティソンを手している者があれば、それは若いものに限つていた。當の牧師は、その方面の話でも出ると、三十年前からきまつて「クロップショトックの救世主はお読みですか」ととき、そして勿論、讀んだという返事を聞くと、用心ぶかく口をつぐんでしまふ。しかし客人たちの方も、決して

てその時代の興味の中心をなしている文化を培うために、精神的な努力を倍加しようとか、高貴な教養によってその文化を鞏固ならしめようとかするような、そんな高尚な心構えのものは更になく、ただただ他人の努力の結晶を味わって、自分は腦漿をしぼらずに、教會開基祭のつづくかぎり、安樂にその日をすごせさえすれば結構だと考えているような、のんびりした連中ばかりだった。

しかし、こうした榮華もすでに崩壞の兆を裏にはらんでいた。牧師には一男一女があつたが、どちらの子もその性癖が周囲の傾向とは相容れないものだった。息子のはうは、同じように牧師であつて、ゆくゆくは父の跡を繼ぐことになつていたが、若い農夫たちとの間にいろいろな繋がりが出ていて、終日彼らといつしよに畑で暮したり、家畜の市へ出歩いては一廉の鑑定家らしく若い牝牛を撫でてみたりしたものだが、娘のほうも機會さえあればギリシャ風の衣裳を釘に掛けて、寮所か野榮畑へ退却し、せわしない客人たちが遊山から戻ってきた時に腹の足しになるものを食べさせようと、もっぱらそのほうの世話に憂身をやつしていた。勿論このお料理は、食道樂の都會人どもをひきつける魅力のうちの決して最小のものではなかったし、整然と耕された大きな野榮畑は、不斷の勤勉と模範的な几帳面さとを説明して餘りあるものではあつたが。

息子はそのうちに動作のてきぱきした金持の百姓娘と結婚して嫁の家へ引越してゆき、日曜以外の六日間を畑仕事と家畜の世話とにすごすようになって、自分の計畫を仕上げてし

まった。聖職の候補者でいる間に、彼は種蒔く人として神から與えられた種を精確な距離に蒔き、ちゃんと形をそなえた雑草を抜いて、惡を刈りとする練習をつんだわけだ。牧師館ではそれを聞いて、大いに驚きもし怒りもした、ことにその若い百姓女が、いつかは主婦としてそこへ乗りこんで采配をふるう時が来ることを考えれば、それにも一理があると言えよう。大體その女には、牧師夫人らしい品のいい姿勢をして草の中に寝そべるなぞという藝當も、ないしはまた牧師館の女主人らしく兎を多つてそれを食卓へ運んで来るなぞという藝當も、できっこないのだから。そこで一般の人たちは、娘のほうに、この方もおいおい盛りを過ぎようとしていたが、自分の階級を裏切らないような若い牧師を婿にもらうか、さもなければ、今後も引きつづき牧師館の大黒柱になつていてもらいたいと望んでいた。だが、この希望さえ水泡に歸してしまつた。

第二章 父と母

そうなつた理由というのは、或る日のこと、仕立ての斬新な緑いろの上品な禮服をきて、びつたり體についた白のズボンに、黄色い折り返しをついたびかびかのスワロウ長靴をはいた、背のすらりと高い一人の美しい青年が村に乗りこんできて、全村の目をみはらせたがためであつた。雨模様目の目にはこの青年は赤い絹の蝙蝠傘を携帶していたが、細工の細かい大型の金時計も、百姓の目から見ると、いかにも堂々たる

紳士らしくみえた。彼は村の狭い通りを鷹揚にのして歩き、其方此方の低い玄關へ愛想よくはいって行つては、おぼあさんたちやおじいさんたちをたずねてまわつたが、この青年こそ、長い修業の旅を終えて、錦をきて故郷へかへつた遍歴の石工レーにほかならなかつた。思えば十二年前に十四歳の少年だつた彼が、一文なしで故郷を出奔し、その後親方について長年の勞苦をつんで、ようやく徒弟時代を濟ませ、中味のない旅費と輕い財布とをもつて異郷の空に旅寝をかさね、今こうして村人たちから本物の紳士と呼ばれるような身分になつて歸つてきたのであるから、錦をきてといつても、あながち過褒ではないであらう。というのは、彼が足をとめた親類の家の低い屋根のしたには、岩乗な大トランクが二つも預けてあつて、そのひとつには服や上等の肌膚類、もうひとつには雛型や圖や書物なぞがぎっしり詰まつていた。この二十六歳の青年の風采態度には、どことなく潑刺たる生氣がこもり、眼には胸のなかに燃えている熱情と感激との不斷の輝きともいふべきものが煌めいていた。語る言葉はいつも標準ドイツ語で、取るに足らぬ瑣末事でもその一番美しい一番良い側面から見ようとしていた。南から北へかけてドイツ全國を股にかけ、大都會という大都會にはかならず何かの仕事を残してきた。前後三年にわたる多事多端な自由戰爭の時期は、ちょうど彼の遍歴時代にあたつていたので、彼は自分の智力のおよぶ限り、その時代の教養と思潮とを取りいれてきた。ことに彼は良き中産階級といふしよになつて、現實のより良いより美しい時代が来ることを衷心から公明正大な氣持で期待し

ていたが、ただし當時上流社會のなかに蔓延していた、いろいろな方面の精神的な伊達好みや悦樂には、まったく無關心だった。

それから二十年の後には、彼のように高い修養と教養とを積むことが遍歴職人たちの風潮になったが、當時はまだ職人仲間の間にそういう風潮の隠れた稀有な萌芽をつちかう者は稀だったし、また最良の職人としてもはやされることを誇りとし、勤勉と節度によって一身代つくりあげて、精神をみがき、遍歴中から内面的にも外面的にも尊敬すべき腕利きになろうと心がけるような者も極めて稀だった。その上、古いドイツの勝れた建築物を見てまわっている間に、この石工の心にはますます明らかに前途をてらす光明がさしこみ、胸は藝術家としての晴れ晴れしい豫感にふくらみ、かつて都會の美的生活にあこがれて、緑の野を捨てさった當時の驕げな衝動が、今にして初めて是認されるかのように思われたのであった。彼は鐵のごとき勤勉をもって製圖を學び、夜も休日もお構いなしにあらゆる種類の作と意匠との敷き寫しにはげんだが、やがて精妙きわまる建築と裝飾とに鑒をふるう技を會得して、完全な職人になってからのちも、研究の手をゆるめるどころか、さらに彫石の技を學び、建築術に屬する一切の部門に必要な學問さえもおさめたのである。そしてどこへ行っても、見るに足り學ぶに足る大きな公共建築物の工事があれば、そこに職を求めて、注意ぶかい研究心をしめしたので、この建築師でも彼には普請場の仕事はもとよりのこと、事務室の製圖机や書き物机の上での仕事まであてがってくれ

た。そういう場合、彼が油を賣って、晝休みの時間にさえ、手に入るものはどんなものでも敷き寫し、どんな計算でも寫しとっておいたことなどは、ことわるまでもないことであらう。こうして彼は、多方面の教育をそなえた大學出の技術家でこそないが、とにかく、故郷の州の首府で腕利きの建築師、左官の親方として立とうという大膽な抱負をいだくには、十分の資格をそなえた人間となったのである。今や彼がふたたび村へ姿を現わして親類どもの度膽を抜いたのも、こういうのはっきりした目論みがあつてのことだったが、このカフスつきのしゃれたシャツを着て、純粹の標準ドイツ語をつかう彼が、牧師館へ出入りするフランス好みギリシャ好みの人たちの眞中へ割りこんで、牧師のお嬢さんに結婚を申し込んだということは、實に驚天動地の出来事だった。これには、勿論、純朴な考えをもった兄の媒介があつたか、あるいは少くとも兄の先例が石工の勇氣をふるいたたすに役立ったのであらう。令嬢のほうも間もなくこの美しい求婚者に愛情をいだくようになり、おまけに、この事件によってまき起されそうにみえたごたごたも、令嬢の両親が相ついで亡くなったために、たちまち解消されてしまった。

そこで二人は内輪だけの結婚式をあげて、牧師館の華やかな過去なぞにはいささかの未練もなく、さっさと市へ引越していつてしまった。一方、牧師館へはその後間もなく嗣子の若い牧師が大鎌、鎌、連枷、熊手、乾草用の熊手を幾臺かの車に山と積み、仰山な天蓋附寝臺、紡車、麻拔なぞをはこびこんで、てきばきした元氣者の細君といっしょに引越してき

たが、細君はお手製の燻製のベーコンやこち、こちの粉團子を持ちこんだかわりに、たちまちモスリンの衣裳や扇や日傘なぞの類を残らず、家のなかからも庭のなかからも一掃してしまった。ただ、嗣子もその使い方を心得ている素晴らしい獵銃だけが壁のひとつに昔のまんま掛け列ねてあったので、それにひかれて秋になると狩獵家がぼつぼつこの村へやって來たが、牧師館とただの百姓家とちがっている點は、まずこの一點だけであつた。

市へ行った若い建築師の方は、まず若干の職人をやとい入れて、自分も朝から晩まで働きながら、あらゆる種類の小さい注文を引きうけたが、どの仕事にも器用で確かな腕前があらわれていたので、一年もたたないうちに商賣も手廣くなり、信用も増してきた。というのも、獨創的で目先がきいて、敏捷で頭の働きが鋭いからで、部分的な改築や新築を望みながら途方にくれているような市民で、相談にくるもの仕事を頼みにくるものが門前に市をなす有様だった。しかも彼はいつも、美と實用とを兼ね備えることを目標として、自分の思いどおりにさえやらせてもらえれば御機嫌がよかったから、顧客の方でも、この建築師の趣味に對して特別の謝禮をはらわないでも、見事に均齊のとれた裝飾や窓や蛇腹をつくつてもらえる利益があつた。

細君は家事に全身をうちこむほどの世話女房だったが、家政の方もいろいろの職人や召使がふえるにつれて、にわかに膨脹していった。彼女は澤山ある大きな食料の籠から物を出し入れするにもてきばきと器用だったが、そのかわり市場の

物賣り婆さんにとっては苦手であり、肉屋の亭主にとっては頭痛の種だった。ことに肉屋のごときは、レーの奥さんに賣る肉の目方をはかるときには、秤皿の上へ骨片ひとつのせるのにも、死力をつくして昔からの權利を振りまわさなければならなかった。親方のレーはほとんど全く自分だけの道樂なぞをもたない人間で、儉約を主義の第一として標榜していたが、同時に公益のためにはいたつて氣前のいいところがあつて、自分の手を通してなり他人の手を通してなり、それが何かの足しになり何かの役に立つときだけ、金錢というものの價值をみとめるといった風の人物だった。だから彼が二年ないし三年の後にすでに貯えができて、以前から持っていた信用とその貯えとで、進取的な精神を層一層發揮しようになつたのも、これひとえに、一文も無駄づかいをせず、相手の如何を問わず、髪一筋の過不足もなしに、與えるべきものを與えることを最大の名譽と心得ている細君のお蔭だった。彼は自分の金で古い家を幾軒も買いとり、それを取りこわして、その場所へ堂々たる住宅を建て、他人あるいは自分が考案した數々の設備をほどこした。そして何か新しい計畫でも思いつくと、それらの家々を大なり小なりの利益を納めてつぎつぎに賣り拂つていったが、彼がつくつた建物にはどれもこれも、形式の豊かさと思想の豊かさとは追求する不斷の努力の跡がのこっていた。建築學の大家ともいわれるような人の目から見れば、レーが現わそうとした觀念はどういう範疇に屬するもののかしはしばしば不明であつて、多くの點はむしろ不明瞭と不調和とに歸せられるようなこともあつたろうが、

それにもかかわらず、そこに思想の存在するとはいひなみがたい事實であつたし、また、その學者が公平な人であれば、すくなくとも、藝術の中心地を離れた地方などにはありがちな、建築術の精神的貧困と無味乾燥との時代にあつて、建築師レーの美しい熱意を見いだしたことを、稱讃せずにはいられなかつたはずである。

こういう活動的な生活をいとなんでゐる間に、倦むことを知らない建築師は、いつの間に市民のうちの或る大きな團體の中心に祭りあげられてしまい、彼らと彼とはおたがいに影響しあつてゐたが、そのうちにその人たちのなかでも時代の動きに對して敏感な同志だけの小委員會ができあがり、彼は善と美とに對する自分のやむことなき探求を、その人々に傳えたのであつた。これは、一八二〇年代の中頃のことでつたが、當時スイスでは、支配階級出身の教養ある多數の人士が、淨化された大革命の精神をふたたび取りあげて、昔の恩義にむくいようと七月革命のための豐穰な地盤を用意し、教養と人間的尊嚴との高貴な財を慎重につちかつていたのである。レーもこの人々の意志を受けついで、自分にゆつたされた範圍内で、同志の人々とともに、中産階級の職人たちの間に有力な團體をつくりあげたわけだが、もともとこの中産階級は、下層階級から出て、昔から近隣に根を張つて成りあがつてきたものであつた。一方では例の貴顯とか學者とかいう連中が、將來の國家形態とか哲學的眞理と法律的眞理とかについて議論を戦わしたり、より美しい人道の問題は大體において自分たちの専門の問題だなどと考えたりしてゐる間に、敏

腕な職人たちはむしろ自分たち同志の間と下層階級とに向つて働きかけ、さしあたり全く實踐的に出来るだけの設備をほどこしておこうと心がけていた。澤山の會が設立され、なかにはその種の會の魁となつたものも多かつたが、目的は主として會員およびその家族の福祉のために或る種の保證をあたえることにあつた。また平民の子弟により良い教育を授けるための學校も、社會的施設として建設された。要するに、當時まだ斬新でもあり實益もあつたこの種の事業が、數多く創始されたために、有能な人間は安逸を貪つてゐられなかつたし、それによつて自分の教養を深める機會もあたえられたわけである。なぜかといへば、頻繁な寄合の席では、あらゆる種類の規約が立案され討議され検討され採用されたり、會長が選出されたり、また内外にむかつて會の權利と形式とが宣言され保護されなければならなかつたからである。

こういう各種の事情が存在した上に、折しも起つたギリシャ獨立戰爭の問題が共通にそれらと合流したために、他の國と同様スイスでも、一般的に弛緩してゐた精神がはじめて覺醒され、自由の問題こそ全人類の問題であることを、事新しく思い出させられたのである。ギリシャ問題への關心は、元來それとは異なつた目的のために邁進してゐる、ギリシャ語などには縁のない同志たちに、高尚な世界主義的な昂奮をあたえ、事理に明るい職人たちから、ちよつたり残つていた俗物氣質素町人氣質まで剝ぎとつてしまつた。レーは、何かにつけていつも首頭取りの役目をつとめていたが、何人にとつても信頼すべき獻身的な友であつたし、生一本な性格と高邁